イルカ資源管理調査*

概　要

武田　保幸・竹内　淳一

目　的

本調査の目的は、我が国周辺に分布回遊するイルカ類資源とその利用の実態を把握し、その資源の合理的利用と保存を図るために必要な科学的知見を収集・整備することである。

和歌山県では小型鯨類を漁獲対象とする漁業として、小型捕鯨、追い込み漁業そしてイルカ突棒漁業の三つがある。このうち、水産庁からとくに調査が求められているのは、「イルカ突棒漁業」の漁業実態についてである。この調査によって、イルカ突棒漁業による漁獲選択性と操業実態などの状況を把握し、当該漁業の資源管理に関する情報の充実をはかる。

本調査は水産庁の委託を受けて実施するもので、平成10〜14年度の５カ年計画である。その詳細は「平成11年度いるか資源管理調査委託事業報告書」として報告した。ここでは、その概要について報告する。

方　法

調査は平成11年度いるか資源管理調査委託事業実施計画書に基づいて行った。

調査項目などは次のとおりである。

1　勝浦市場調査

イルカ突棒漁業によって漁獲され、勝浦市場に水揚げされるイルカ類について各個体ごとの種類、性別、体長、漁獲位置などの生物調査を行った。

調査は勝浦漁業協同組合の速水勝浩氏の協力を得て行った。

1）イルカ類の種類と漁況などの聴取

勝浦市場に水揚されたイルカ類の捕獲日、種類、性別、体長、水温、船名、発見日時、発見位置などについて漁業者のメモあるいは記憶を基にした聞き取り調査を実施した。

勝浦市場に水揚げされるイルカは、そのすべてが洋上解体されたものである。水揚入札時に、調査員が漁獲物の製品とその重量などからイルカの種類と頭数の確認を行う。体長の測定は、漁業者が原則として巻尺を使い直接測定を行った。調査は原則として勝浦に水揚されたイルカ類についての全数調査であり、水揚時に実施した。

2）イルカ類の水揚重量調査

水揚船別にイルカの種類とその製品重量を勝浦漁協の浜帳から調査した。

2　和歌山県全数調査

和歌山県では、指定されたイルカ類の陸揚地（田辺、太地、勝浦、三輪崎）から、毎日、和歌山海

---

*いるか資源管理調査委託事業費による。

区漁業調整委員会事務局あてに、日別・種類別の捕獲頭数を報告するシステムが確立されている。これによって、種類毎に許可捕獲枠を越えることがないように捕獲頭数の残りを即日に知ることができ、捕獲頭数の漁獲管理が行われている。

この資料を利用して、1999年５月～８月（1999年夏季）と1999年12月～2000年２月（1999年冬季）の期間について、日別・種類別の全捕獲頭数を調査した。

3　イルカ類調査の説明会

イルカ突棒漁業者を対象に説明会を開き、次の項目についての協力を依頼した。

(1) イルカ類の水揚実績の詳細（種類、頭数、重量など）の調査・集計

(2) 勝浦市場における捕獲データの聴取

(3) 体長測定・写真撮影

説明会は次のとおり実施した。

第１回目：1998年４月26日　勝浦漁協会議室

イルカ突棒組合の役員に、５～８月の漁期について体長測定・写真撮影を依頼し、巻き尺と使い捨てカメラを手渡した。

第２回目：1999年１月７日　太地漁協会議室

イルカ突棒組合の役員に、１月以降の体長測定・写真と下顎の歯採取を依頼し、許可を受けている漁業者　全員に採取用のノコギリを渡すことに決定した。

第３回目：1999年１月14日　勝浦漁協会議室

勝浦漁協突棒漁業者全員に、１月以降の体長測定・写真と下顎の歯採取を依頼し、全員にノコギリと使い捨てカメラを手渡した。当日、その他各漁協（三輪崎・宇久井・太地・古座）を回り同様に手渡した。

結　　果

調査結果の詳細は「平成11年度いるか資源管理調査委託事業報告書」として報告しているので、次に示す項目ごとに主な調査結果を示す。

1　勝浦市場調査

1）イルカ類の種類と漁況などの聴取

勝浦市場における漁獲物の種類、性別、体長、漁獲位置などの聴取した結果の詳細は、個体識別して表にとりまとめ遠洋水産研究所に報告した。ここでは月別あるいは季節別に集計した結果の概要を記載する。

(1) 勝浦市場における捕獲状況

勝浦市場に水揚げされた1998年、1999年の種類別・月別の捕獲頭数を夏季（図１）と冬季（図２）に分けて示す。

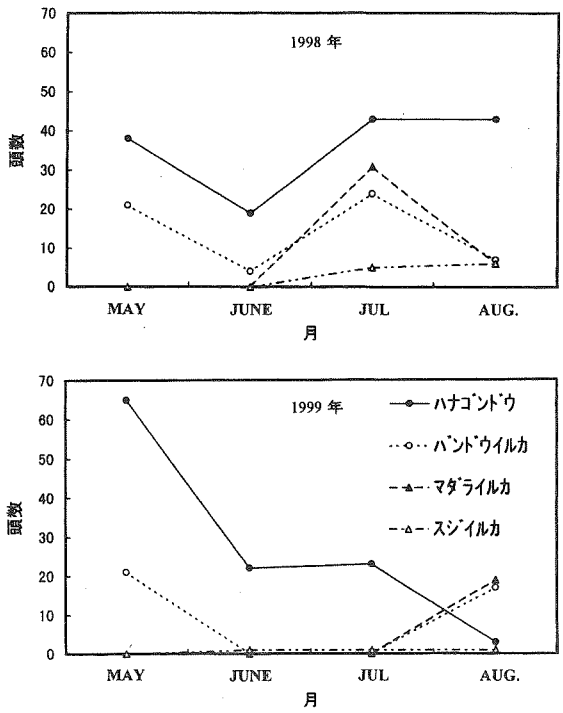

図１　イルカ突棒漁業による捕獲頭数の月別変化
（夏季、勝浦市場水揚分）

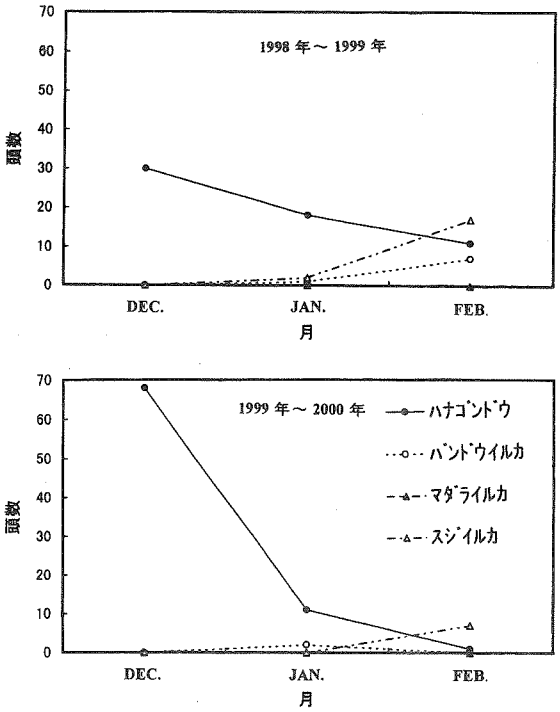

図２　イルカ突棒漁業による捕獲頭数の月別変化
（冬季、勝浦市場水揚分）

1999年夏季の捕獲頭数は、５月にハナゴンドウが65頭と前年を上回った。他の３種（バンドウイルカ、スジイルカ、マダライルカ）では、いずれも前年を下回った。

1999年冬季の捕獲頭数は、12月にハナゴンドウが68頭と前年を上回ったが、他の３種（バンドウイルカ、スジイルカ、マダライルカ）はいずれも前年を下回った。

(2) 体長組成

捕獲直後に船上で体長測定と写真撮影を行ったハナゴンドウとバンドウイルカの体長組成を、それぞれ図３と図４に示す。ハナゴンドウでは260cmと280cm、バンドウイルカでは290cmと310cmにピークのある２峰型がうかがわれる。バンドウイルカでは270cm以下の捕獲もあった。

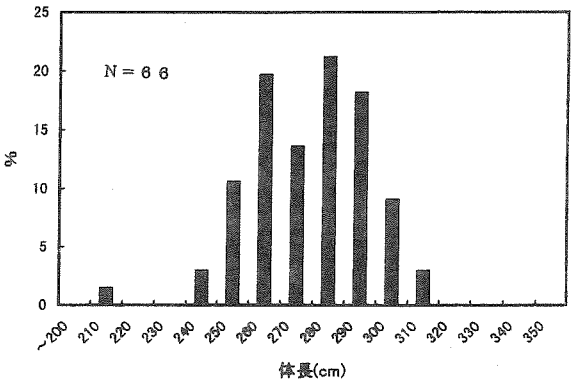

図３　1999年夏季（５～８月）における
ハナゴンドウの体長組成

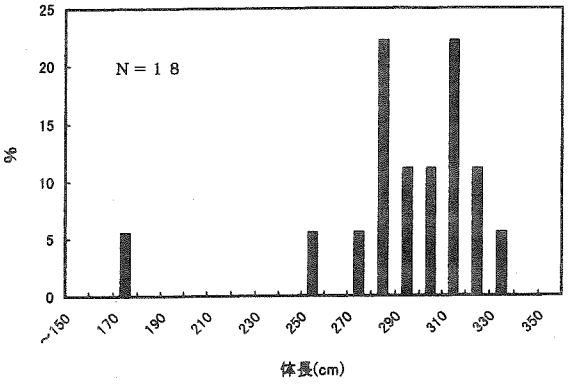

図４　1999年夏季（５～８月）における
バンドウイルカの体長組成

(3) イルカ種類別の捕獲位置

イルカ種類別の捕獲位置を夏季（1999年５～８月）と冬季（1999年12～2000年２月）に区分してとりまとめた。

ハナゴンドウ：1999年夏季の捕獲位置は、熊野灘南部のやや沖合側の広範囲（33° 26'～40'、135° 58'～136° 20'E）に分布していた（図５）。これは、黒潮が潮岬に接近して流れる時にできる流れの影領域にあたる。

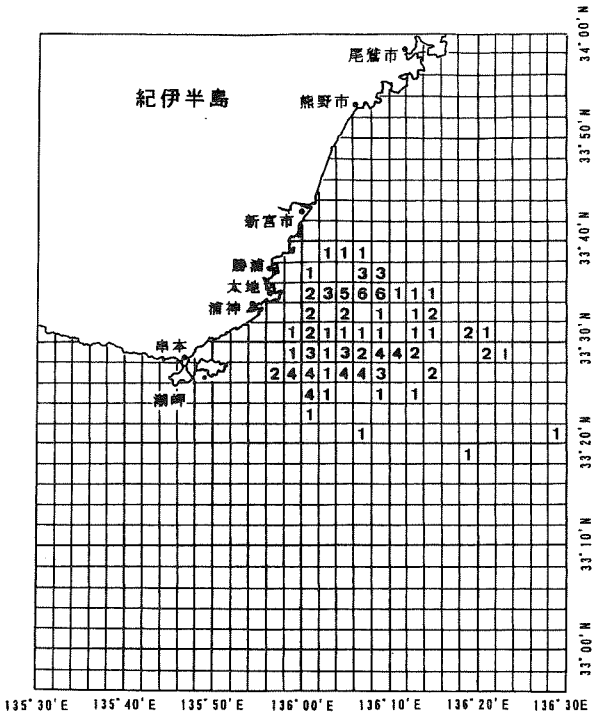

図５　ハナゴンドウの捕獲位置
1999年５～８月（夏季）

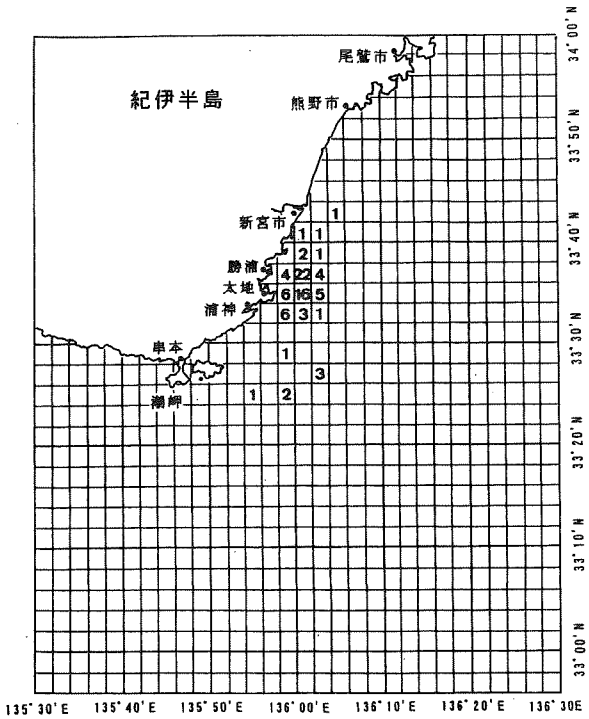

図６　ハナゴンドウの捕獲位置
1999年12～2000年３月（冬季）

1999年冬季は梶取埼～駒埼の５マイル以内のごく沿岸部（33° 32'～40'、135° 58'～136° 04'E）に分布の中心がみられた（図６）。夏季に比べるとごく沿岸域に集中した分布であることが特徴的である。本種の捕獲が多かった時期はスルメイカの来遊時期と一致していた（図７）。

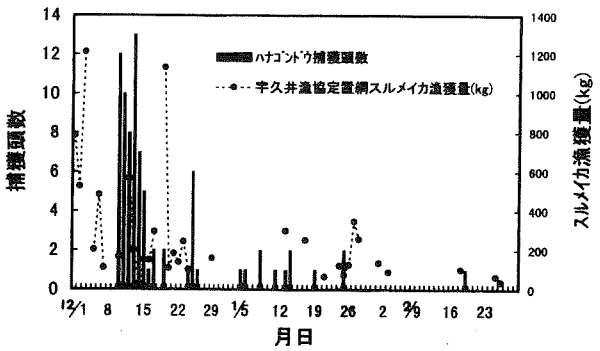

図７　日別のハナゴンドウ捕獲頭数とスルメイカ漁獲漁との関係
1999年12月～2000年２月

バンドウイルカ：1999年夏季の捕獲位置は、昨年同様に熊野灘のやや沖合側(33° 20'～36'N、136° 04'～136° 16'E）であった。

マダライルカ：1999年夏季の捕獲位置は、潮岬南南東沖～東沖の広い範囲（33° 00'～36'N、135° 56'～136° 16'E）にあり、黒潮流域から黒潮北縁位置を中心に分布がみられた。

スジイルカ：捕獲が合計６件とデータ数が少ないので、はっきりしたことはわからないが、夏季は熊野灘南部沖、冬季は駒埼の沿岸と潮岬南南西の沖合側に分布がみられた。

３）イルカ類の水揚重量調査

水揚船別にイルカの種類とその製品重量を勝浦漁協の浜帳から調査した。

勝浦漁協の入札水揚伝票から個体別に製品重量（肉・皮・頭皮・オバキ・ハラミ・バラミ：これらの合計したものを製品重量合計とする）を調べた。ハナゴンドウとバンドウイルカの肉数量と製品重量合計には、正の相関関係が認められた。

2　和歌山県全数調査

和歌山県で水揚されたイルカ類の種類別、日別の全数調査結果は、表にとりまとめて遠洋水産研究所に報告した。これを月別に集計し表１に示す。種類ごとの捕獲状況は、前項で示した勝浦市場の結果とほぼ同じである。前年と比較すると、夏季は全種類で捕獲頭数が減少したこと、ハナゴンドウが５月と12月に多く、バンドウイルカが７月にきわめて少なかったことが特徴である。

表１　イルカ種類別の月別頭数集計（イルカ突棒漁業、和歌山県捕獲全数）

種類	ハナゴンドウ		バンドウイルカ		スジイルカ		マダライルカ	
	1998年	1999年	1998年	1999年	1998年	1999年	1998年	1999年
５月	38	70	39	35	0	0	14	7
６月	19	23	8	8	0	1	6	4
７月	32	23	24	1	6	1	34	4
８月	56	4	10	16	7	4	9	21
夏季計	145	120	81	60	13	6	63	36
12月	30	75	0	0	0	0	0	0
１月	18	11	1	2	4	0	2	0
２月	12	1	7	12	65	25	2	0
冬季計	60	87	8	14	69	25	4	0

注：１，２月の年号は表頭の翌年である。